*Adam Bede*のHayslope村，*Silas Marner*のRaveloe村，*Felix Holt*のLittle Treby村がそれぞれの小説に意味するもの

嶋　田　貴美子

1．はじめに

George Eliot自身，"there is no private life which has not been determined by a wider public life"[(1)]（「より広い公的生活によって規定されない個人的生活はありえない」）と言い，さらにまたフランスの哲学者コントの説く「人類は総体であり，個人は一部分である。したがって個人はあらゆる意味において全体である人類に服従すべきものであり，おのれを殺して他人に生きるのがわれわれの最上の道徳である」という実証哲学に大いに共鳴していたことからも推測されるように，George Eliotの小説の中ではhero, heroineとなるべき人々の属する共同体[(2)]が，ことのほか重要性を持ち，その小説に多大の効果的役割を果すことはいうまでもない。そのようなGeorge Eliotの小説に共通した構造上の特性をJoan Bennetはan inner cercle (a small group of individuals involved in a moral dilemma) surrounded by an outer circle (the social world within which the dilemma has to be resolved)〔内部集団（道徳的ジレンマに陥った小数の人々の集団）とそれを取りまく外界（そのジレンマがそこで解決されるべき社会）〕として総括[(3)]するのである。

そのような特性を持つGeorge Eliotの小説の中でも，古い時代に時が指定されたイギリスのある特定の地域共同体が小説の中で重要な役割を担っていることで共通の構造を持つ*Adam Bede*と*Silas Marner*と*Felix Holt the Radical*は彼女が追及する社会的人間像を考察する上では特に注目される。すなわち，*Adam Bede*（1859年）のHayslope村は，その執筆年代よりも60年ほど以前の，イギリス中部の最もイギリス的な農村の姿を持った村であり，*Silas Marner*（1861年）のRaveloe村もHayslope村とわずかに地域は異にするものの，*Adam Bede*と同じ年代のイギリスの村であり，また*Felix Holt*のLittle Treby村は1832年９月１日（第一次選挙法案がイギリス国会を通過した日）という小説の最初に記されている日付から小説執筆年代の34年をさかのぼった遠い過去に時が設定されているのである。George Eliot自身が誕生したのが1819年11月22日であって，これら三つの小説は彼女の40歳から47歳までの作品であることを考えると，Hayslope村，Ravelosh村は彼女の誕生以前の，したがって彼女が全くの空想の中に作り出した古いイギリスの農村ということになる。

George Eliotは1857年10月17日付の出版社宛の手紙の中で"It will be a country story－full of the breath of cows and the scent of hay"[(4)]（「それは田園の物語なのです—牛の息と干草の匂いでいっぱいのものにするつもりです」）と，執筆中であった*Adam Bede*について自ら語っ

ており，自分の慣れ親しんだなつかしい農村の姿を*Adam Bede*の中で絶対化したいという気持と，その折も折George Henry Lewesとの同棲のために故郷との絶縁を余儀なくされた状況下にあって望郷の念はおさえがたく，それらの思いが*Adam Bede*執筆の原動力になったことは事実であろう。またさらにGerald Bullet氏も"It is a common place of criticism that a novelist's imagination is most at home and his art most persuasive when he writes of scenes familiarly known and unconsciously assimilated in early life ; and this is what George Eliot was doing in her country novels. She herself had been born and bred in rural Warwickshire, ····England (···) is most English in those midland shires, and George Eliot knew them, or knew their essential features—the farms, the lush fields, the brown canals, the rattle of cottage looms, and above all the racy speech of yoeman and peasant—as only a child can. Her discriptions of country things and her characterization of country people have all the warmth and colour of memory,···· (小説家の想像力はよく見知った場面や無意識のうちに子供の頃の生活と同化している場面を描く時もっともくつろいだものとなり，そのため彼の文章はもっとも説得力をもつものとなるというのが文芸批評の常識である。このことはGeorge Eliotが田園小説を書く場合にいつも行なっていることである。彼女は自分自身，Warwickshireという田園地帯に生まれ育った。イギリスはそれら中部の諸州でもっともイギリス的なのであるが，George Eliotはその中部諸州のこと，すなわちそれらの州の赤裸々な姿—農場とか作物の青々と生い茂った畑，褐色の水の流れる運河，農家からきこえる機織のガタガタという音，そしてとりわけヨーマンや農民たちの威勢のいい会話—に子供なりによくなじんでいた。彼女が描く田舎の風物や田舎の人々の性格描写は彼女の思い出の中の暖かさと様相を呈している。····) と述べているのであるが，しかし執筆年代より60年も以前の小説として厳密に時を限定している*Adam Bede*のHayslope村や*Silas Marner*のRaveloe村，それからそこに登場する人々においては，それらの作品の舞台が彼女の誕生以前のものということを考え合わせると単に作者のmemoryの中に息ずいているふるさとへのノスタルジアの中で，作者のimaginationをat homeにし，作者の筆をpersuasiveにするその効果のためにだけ設定されたのではないことがわかるであろう。そしてまた*Felix Holt*のLittle Treby村の場合も，執筆年代よりも三十数年前という厳密な時の設定が，その，時の向こうに，ある一つの重大な意義を提示していると考えられるのである。(5)

その辺の事情についてはGeorge Eliot自身が*Felix Holt*の冒頭にのせたIntroductionの中に，一つのSuggestionを発見することができるであろう。Five and thirty years ago the glory had not departed from the old coachroads ; (35年前には馬車が通った古い街道ぞいからはまだ栄光は消えてはいなかった。) という文章で始まるそのIntroductionには，産業革命によるmanufacturing townの急激な発展で大きな侵害を受けつつもイギリスの随所になおかつ見られるgloryが紹介され，また産業革命の影響の下にgloryの全く消えてしまった村のありさまやそこに住む人々の生活が作者の主観をまじえて描かれている。

George Eliotが指摘するgloryとはfull-uddered cows (乳房をミルクでいっぱいにした牛た

ち）の群れた牧場，nightshade（いぬほうずき）やdogrose,[6] convolvulus（ひるがお），honeysuckle（すいかずら）などの花々で色どられたhedgerow（生垣）に囲まれた家々，そしてそれらの花々の美しさと芳香にあふれた村落，trim cheerful villages, with a neat or handsome personage and grey church set in the midst（中央にこじんまりした魅力的な牧師館と灰色の教会のあるきれいで気持のよい村々），そしてまたそういう村々の中できこえる鍛冶屋の金床の鳴るチンチンというゆかいな音，その鍛冶屋のドアのところで蹄鉄を打つのを待っている馬車馬，日なたで柳の枝の皮をはいでいるbasket-makerの姿，赤い輪のついた青くぬった馬車に最後の一筆を加えようとしているwheelwright（車大工），満開のほうせんかやゼラニウムの花の鉢で飾られた明かるいガラス窓を持った農家，井戸端でみかける，とってのついたバケツをたずさえたこざっぱりとした身なりのきれいな女たち，またfree schoolの方に向かってのらくらと歩いていくsmall Britons（小さな英国人たち），そして真ちゅうのボタンがいっぱいついたつぎ当てのしてないコール天の服のポケットに手をつっこんで中に入っているマーブル（marbles）[7]をいじくっている子供たち，泥灰土の肥沃な土地，干し草置場になっている中庭にそびえる大きな麦わらの山，地代も全然支払う必要がなかったり，あるいはある借地契約をするだけの希有な利点を持ち（who paid no rent, or had the rare advantage of a lease），穀物価格が最高に達するまで小麦を保存しておく余裕のある富裕な農民たち，貴族的な牧師がいて貧しい者のほとんどいない田園地帯，村の外側にある畑への往復時や，市場町に出かけるのによく手入れの行き届いた馬にどっしりとまたがったり，二輪馬車（gig）に乗ったりする農民たち，旅客用馬車（coach）を一種の軽蔑の念をもってながめ，馬車（coach）が自家用の二輪馬車（gig）を持てない人のための便宜であって，そのようなものに乗る人はロンドンとかどこか遠方に旅をしようと思っている人たちであろうし，きっと商人かなにかのあまり安定しない仕事をしている人たちであろうと思っている人々，等々をあげている。

逆にgloryの消えた村の状態については，黒ずんだ土地，石灰採掘場，手織機（hand looms）のガタガタいう音，体つきはたくましいけれども炭坑でしゃがんで仕事をしているために膝が外側に曲がってしまっておかしなかっこうで歩いている人々，家に帰ると黒ずんだフランネルに身を投げ出して日中はずっと眠り，起き出すと居酒屋（ale-house）に行ってはBenefit Club[8]（共済クラブ）の仲またちといっしょに，手に入れた高賃金の多くを使い果たしてしまう男たち，一週間分の仕事を終えるために夜遅くまで働かなければならず，疲れ切った男や女の青白く熱っぽい顔，無気力な母親たちが機織りに全精力を使ってしまったためにうすよごれたままになっているあたりの家々や小さな子供たち，あたり一帯にたれこめて周りの空気をいたたまれない不安感（eager unrest）でいっぱいにし，昼間は空にもやをかけ，夜は地平線上に赤くほのめく工場街の息吹，自分たちの宗教は必ずしも支配者たちの宗教と同じではなく，そのために支配者は自分たちよりもそれだけいい人たちなのだし，いい人たちなのだったら，現在のこの世の中を，そうあるべき状態よりもつらいものにし罪深いものにしているに違いない多くの物事をかえてくれるかもしれないと思っている村人たち，などを指摘している。

これは1830年代初め頃，イギリス縦断の，stage-coach（駅馬車）による旅の感慨という形で

述べられたものであり，George Eliotの社会的視点と共に，当時のイギリスの社会的状況がよくわかるであろうという意図に基づいてあえて逐一引用したのであるが，ここでみる限りGeorge Eliotは農業にことのほか価値を置き，農夫たちが生き生きと仕事に励んでいる農村にこそ最高のgloryを見い出しているのである。農民たちが自らの仕事に誇りをもって打ちこむところには貧困はありえず，そのような富裕な，ちょっぴり貴族的な国教会牧師を擁した村の生活にこそ人間の本来的な生き方があると主張する。それゆえ，農夫たちが鋤を捨てて炭坑や機織の仕事に移り，coal-pit（石炭採掘場）でよごされ，handloom（手織機）のガタガタいう音でその静寂が破壊された村々の村民たちの生活をhigh wagesを手にしているにもかかわらず精神的貧困のはなはだしい非人間的なものと考え，その原因となった産業革命を糾弾する。

*Felix Holt*の舞台であるLittle Treby村はshuttle（近距離間の定期往復便）や車（wheel）がせわしなく行き来し，溶鉱炉のゴーゴーという音やハンマーや滑車の動くあわただしさが渦巻くmanufacturing townであるTreby Magnaからたった一マイルしか離れていないところに位置した村というから，人々の思想，生活様式等，Treby Magnaの影響をもろに受けた，gloryのまさに消えつつある村ということができるであろう。

こうしてみるとGeorge Eliotの想念の中にはイギリスの村落にあるgloryをことのほか大切に思う気持が潜んでいるのである。そのgloryはもう少し平易な言葉でいえばGeorge Eliotの生まれ故郷であるWarwickshire近辺のthe most English Englandを形成するもろもろの事象ということになるであろうか。しかし，彼女のよく慣れ親しんだふるさとは，1820年代のものであるから*Adam Bede*や*Silas Marmer*の小説の中の年代よりももっと後のことになる。こうしてみると，さらに*Felix Holt*を加えたこれらの小説のバックグラウンドについては，George Eliotが自分の心の中に焼きついているふるさとを通してさらに深く洞察したところにある，農村の最もイギリス的なgloryに満ちた部分と小説のテーマとのかねあいによって，あくまで作者の頭の中に構築された世界であることがわかるであろう。

ではそのような遠い過去の時代の，作者のimaginationの中で創り出されたHayslope村，Raveloe村は*Adam Bede, Silas Marner*の舞台としてどのような必然性をもっているのか，また*Felix Holt*と1832年9月1日という時の指定を受けたLittle Trebyの村がその小説にどんな効果となっているのかということを私はこの論文で追及していきたいのである。しかしそのためには19世紀初期のイギリスがどのような時代的背景を持っていたか，農村部はどんな状態であったかを知ることが肝要であろう。それで前書きがひじょうに長くなってしまったけれども次のような項目に従って述べていこうと思う。

2．19世紀初期のイギリスの時代的背景について

3．イギリスの農村と農業の歴史について

4．Hayslope村，Reveloe村，Little Treby村の実態について

5．結論

しかし紙面の都合上本号では3までを掲載することとする。

2．19世紀初期のイギリスの時代的背景について

19世紀初期のイギリスの社会風土を象徴するものは何と言っても産業革命であろう。産業革命という言葉は「18世紀の後半から19世紀初にかけて行なわれた生産過程の機械化によって資本主義的な社会関係が確立された歴史的過程」[(9)]であると定義される。それは綿工業の機械化，すなわち1773年のWyattの紡織機の発明を皮切りにHargreaves, Arkwright, Cromptonなどによって新しい紡織機械が次々に発明され，さらにそれに加えて1774年Wattが多方面の産業に有用な蒸気機関を発明したことでもたらされた産業の一大変革を意味するものである。特にWattの蒸気機関の発明は画期的なものであり最初炭坑の水をくみ上げるのに利用されて炭坑業務に大きく貢献した上，1800年までには一般の工場に使用され1830年代までには鉄道の機関車に使われて，それまで2600マイルにわたってイングランドをおおっていた運河や水路[(10)]に交通の便をとって代わるようになった。蒸気機関はまた他の繊維工業部門，羊毛工業，リンネル工業[(11)]，絹工業，機械製造工業，金属加工業，鉱山業などに波及効果を及ぼした。このような産業の未曾有の進展によって交通手段は大いに改良され，道路改修，運河建設，汽船建造，鉄道開設などが活発に行なわれるようになった。そしてその交通手段の発達は1863年の，世界初のロンドン地下鉄敷設につながっていく。Dickensの小説に見られるような蒸気機関車の運行に対する人々の恐れと驚きとはまたちょっと異なって，George Eliotは1[(12)]で述べた*Felix Holt*のIntroductionの中で，coachの旅と比較したtube（地下鉄）の旅の味気なさを説き，そのような想像を絶する交通手段の進歩に象徴されるやたらと急がされ潤が全くなくなってしまうであろう人間の生活一般を予見している。

このように産業革命と交通手段の急速な改善とあいまって，ランカシャを中心に近代的工業都市が19世紀の前半までに形成されていく。「しかし元来は人間の労働を節約し軽減すべき機械の発明も，資本家的に使用される工場ではかえって労働時間を延長する手段とされ政府もこれを法律によってでも制限せざるをえないことになる。」[(13)]この都市部での工業労働者の多忙化の傾向は農村部にも波及していったが，“イギリスの最もイギリス的な”部分を残した，都市部とは遠隔の地にある1800年前後頃のHayslope村にはまだまだその触手はのびていなかったようである。それで*George Eliot*はそのHayslope村と比較した*Adam Bede*執筆の年代，すなわち1850年代後半の社会状況についての感慨を次のように語っている。

Leisure is gone－gone where the spinning-wheels are gone, and the pack horses, and the slow wagons, and the pedlars who brought bargains to the door on sunny afternoons. Ingenious philosophers tell you, perhaps, that the great work of the steam-engine is to create leisure for mankind. Do not believe them: it only creates a vacuum for eager thought to rush in. Even idleness is eager now－eager for amusement; prone to excursion trains, art-museums, periodical literature, and exciting novels;‥‥Old leisure was quite a different personage: he only read one newspaper, innocent of leaders, and was free from that periodicity of sensations which we call post-time. He was a comtemplative, rather

stout gentleman, of excellent digestion—of quiet perseptions, undiseased by hypothesis: happy in his inability to know the causes of things, preferring the things themselves.···· Life was not a task to him, but a sinecure: he fingered guineas in his pocket, and ate his dinners, and slept the sleep of the irresponsible; for had he not kept up his charter by going to church on Sunday afternoons? Fine old leisure!(14)

(余暇は消えてしまった。紡ぎ車や駄馬やのろのろと行く馬車が消え，天気のよい日の午後，安価な品々を戸口に運んできた行商人たちが消えると共に。優れた哲学者は多分，蒸気機関の偉大な任務は人類に余暇を生み出すことであると皆さんに教えるであろう。彼らのいうことを信じてはなりません。それは単に熱望の思いが駆け込む空白を創り出すにすぎないのです。現在は怠惰ですら熱望の思いに満ちています—娯楽への熱望なのです。汽車旅行や美術館，定期刊行文学雑誌やおもしろくてたまらない小説などに心が向きがちになる。昔の余暇は全く違ったものでした。社説の載っていない新聞をただ一つ読むだけで，郵便時なるものの感覚の周期性からも解放されていました。人は思索的で優れた同化力のある頑強な紳士であり，物の視方が穏やかで，憶説などにも煩わされていませんでした。物そのものをより好み，その原因を知ることができないことは幸せでした。人生は課題ではなく閑職でした。ポケットの中のギニー金貨を指でまさぐり，ごちそうを食べ責任から放たれて気楽な眠りについたのです。というのは当時の人は日曜時の午後教会に行くことでもう人生の免許状は保持されたのではなかったでしょうか。ああ，すばらしき古き時代の余暇よ。)

このようにGeorge Eliotは，蒸気機関の発明が決定的なものにした産業革命が，真の意味の余暇を消滅させその代わりに偽りの余暇を創出し人々の生活を根底からくつがえしたことを指摘している。

イギリスの都市には大きな工場が次々と建設され，それと共に周りの風土も急激な変化を遂げていったことは疑いない。*Silas Marner*の中でSilasが30年ぶりにふるさとの町を訪れた時，その町の変り方にすっかり仰天し，子供の頃慣れ親しんだ，記憶の中に焼きついているLantern Yardを探し出すことすら困難で，あげくの果てはLantern Yardは消滅し，chapelも何もかも取りはらわれSilasが知っている人も一人とてなく，かわりに大きな工場が建っていたということは驚くには当たらないであろう。この時Silasに同行した養女のEppieはこの町について，

'O what a dark ugly place!" How it hides the sky! It's worse than the workhouse. I'm glad you don't live in this town now, father····" O father, I'm like as if I was stifled. I couldn't ha' thought as any folks live i' this way, so close together. How pretty the Stone-pits 'ull look when we get back!'(15)

(「まあ何てうすよごれたいやなところなのでしょう！」「空もあまり見えないわ。」「これじゃ救貧院よりもっとひどいありさまね。お父さんが今この町に住んでいなくてよかったわ。…」「ああお父さん，私息がつまりそう。人々がこんなふうにくっつきあって住んでいるなんて思いもよらなかったわ。お家に帰ったらストーン・ピット（石切り場）がどんなにかすばらしいところにみえるでしょうね。」)

と評し，またSilasも「いやなにおいがするね。昔はそんなにおいがしたとは思わなかったが」とつぶやいている。それから‘あちらこちらで血色の悪いすすけたような顔がうすぐらい戸口から彼らをじっと見つめていて，エピーをますます不安にさせた。それでその小路から，空がずっと広がったShoe-Laneに入っていった時彼らはやっとホッとしたのであった。

この引用と1で述べた*Felix Holt*のIntroductionの中での描写からもわかるように，George Eliotが描く，当時の農業以外の産業に従事している人々はすべて亡霊のように生気がない。最も英国的な，gloryに満ちた，物質的な意味でも精神的な意味でも貧困を知らない田園地帯に育ったGeorge Eliotには，彼らの生活がいかにも人間性を疎外されたゆゆしいものに映ったのであろう。その気持をここでは，木々が青々と茂り，ぜいたくはできなくても分相応に生活ができ，お互いに助け合い平和で豊かなRaveloeの村で成長したEppieに投影させているのである。しかし*Felix Holt*のLittle Treby村がそうであったように，*Adam Bede*のHayslope村やこのRaveloe村ののどかな田園地帯もまもなく，この産業革命の波がヒタヒタと押し寄せてくるに従いそのgloryも色あせたものにならざるをえなかったのであろうが，*Adam Bede*と*Silas Marner*を見る限りにおいては1800年直後のこの時点ではまだまだイギリスの古い農村の姿を多分に留めた村が英国の中部にはいたるところに存在していたことがわかるであろう。ところが1830年代になると先の*Felix Holt*のIntroductionでも述べたように，生垣が美しく豊かで落着いたたたずまいの農村と，せわしない手織機の音が絶えずする，うすよごれた産業化した村とがまさに背中合わせに存在するという奇妙な現象が生じたのである。そして地方の名門Transome家の威信がわずかに保たれる程度の，もはや農村の姿を完全に失いつつあるLittle Trebyのような村があちこちに見られるようになっていった。

また19世紀初期のこの時代はNapoleon I（1769－1821）の下にフランスが主に英国，プロシャ，オーストリア，ロシアと断続的に戦争を行なったナポレオン戦争（Napoleonic Wars・1796－1815）の時代に当たり，すでに穀物輸入国に転じていたイギリスに穀物の輸入がむずかしくなって穀物価格が騰貴し，大地主にとっては大変好都合な時代であった。これは*Adam Bede*や*Silas Marner*の時代とほぼ一致しRaveloe村の様子についてGeorge EliotもIt was still that golrious war-time which was felt to be a peculiar fovour of Providence towards the landed interest,‥‥(まだ戦争景気の盛りの時で，地主たちへの特別な天の恵みと感じられるような時代であった。)[16]と述べているが，しかしこの穀物価格はナポレオン戦争の終結とともに下落し，イギリス国内の農業不況とあいまって地主階級の利益は再び脅かされ始める。*Adam Bede*が1799年から1807年までのHayslope村を，*Silas Marner*が1800年から1815年ほどまでのRaveloe村を背景にしているのであるからこの穀物価格の下落の現象がこれらの村に小説内で影響を及ぼしている徴候は見られないけれども，Raveloe村のSquire Cassの描写などに，そのような穀物価格の変動によって揺れ動く小地主階級の不安定な状態に対するGeorge Eliotの鋭い洞察の目を感じるのである。

しかし，とにかく英国の政治においては古くから土地を持つ地主階級が実際上最高の地位を獲得し，国家行政ばかりか地方行政もまた完全に彼らの手中に帰していたために，名実ともに[17]

特権階級であった彼らの利益はいろいろな方法で守られたのであった。そして穀物価格下落の急場をしのぎ，地主階級の利益を保護するために1815年穀物条令（Corn Law）が制定された。「この法律は小麦価格が１クォーター80シリング以下のとき，小麦輸入を禁止する」というものであったが，「当然のことながら資本家階級は，低賃銀と工業製品のコスト低価に結びつく外国農産物の安価な流入を望んだから，この法律に反対の態度をとった。」「この法律は，産業資本家だけでなく，実質賃金の上昇を求める労働者や」地代の高騰になやむ「農民にとっても不利であった」ことから「やがてその法律に反対する全国的運動が盛り上がり」1846年この法律は廃止された。しかしその後，「イギリス農業は『高度集約農業』といわれる新農法を採用し，中期ヴィクトリア時代には農業の黄金時代を迎えることになる」[18]のである。

Corn Lawは結局廃止されはしたけれども，この法律の成立過程にみられるように，とにかくイギリスの政治には地主の声が大きく反映されている。そのような地主の政治的権力と社会的地位とを得るために，商業の発達した都市では富を蓄積した商人たちがgentlemanになるために当然のこととして土地を買い，英国貴族の多くが商人の出であるという現象を生み出し，新しい種類の地主が勃興した。「旧家もまた商業界の大立物と婚姻することにより家を富ませ，ますます多くの土地を買うことができた。」当時の様子をDefoeは，「この国では商業は決して地主であることと矛盾するどころか，一言でいえば英国では商業が地主を養成する。なんとなれば一代か二代の後，商人の子，または孫は，もっとも高い家柄やもっとも古い家柄の人々の子孫と同じに，立派な地主，政治家，議員，枢密院，顧問官，裁判官，司教および貴族になるのであるから」といっている。[19]現にThomas Hardyの*Tess of the D'urbervilles*の中に出てくる，Stoke-d'urberville家（その名前から高貴の家柄だと錯覚し，Tessが一家の再興を期して奉公に出た家）は，商人（金貸し・money-lenderだったとも言われる）としてイングランド北部で巨額の財をなしたSimon-stoke老人が，自分の過去の商売の風評の及ばない南部に居を定めることを決意し買い取った家名と屋敷とであった。[20]

この現象はGeorge Eliotの小説の中では，リンネルの織工として巨額の財をたくわえているらしいMarnerが'お偉方'（bigger men）の財産をも買い取ってしまう（地主になること）もできるのだとRaveloeの村の人々が噂するぐらいの描写しかないけれども，ロンドンの商人や，いろいろな手段で巨額の財をなした人々をしばしば描いているCharles Dickensの小説にはこれがテーマになっているものあり，[21]当時のgentlemanの地位，さらにはその地位に付随した高い社会的地位も政治的特権もすべてお金で買えるという貨幣万能の時代を象徴するものでもあった。

Raveloe村の小地主Cass家には26歳のGodfreyを頭に３人の息子があるが，父親のSquire Cassも，この３人の息子のいずれも狭い地域共同体であるRaveloeの村の治安にわずかに力を貸す程度で，政治とか議会にはおよそ縁のない生活をしていたけれども，Hayslope村の大地主Donnithorneの孫の21歳のＪ年を迎えたばかりのArthurはLoamshire Militia（ローム州市民軍）のcaptain（大尉）であり，６～７年先には議会でmaiden speech（処女演説）をするというから国会議員になることが約束されているのであろう。[22]現在でも大地主の占めるイギリス議

会内の勢力は多大のものであるとのことだが，これは遠い過去からの習慣で，大地主に対しては議会は広く門戸を開けていたのである。そういうArthurであるからHetty Sorrelの絞首刑に対して知人であるSheriff（州長官）から放免状（the release）を得ることができたのであった。

また19世紀初期の主なできごととしてはReform Bill（選挙法改正法案）が*Felix Holt*の小説の始まりの日付，1832年9月1日に英国議会を通過し法令となったことである。このReform Billとは「それまでは人口が激増したcountryからも選出しうる議員が二名に限られていたのに反して，人口が激減したrotton boroughs」[23]—腐敗選挙区—から合計160人も選出されていたような不合理を廃して，人口の増減に合わせて議席が再分配されるべきとする議案であり，それと共に新選挙区も創設されることになった。そしてそれ以上に重要なことは選挙資格が拡張されたことである。「農村では，年価値10ポンド以上の謄本土地保有者，一部の定期土地保有者，年50ポンド以上の地代を支払う借地農には選挙権が与えられた。他方都市選挙区では年価値10ポンド以上の住宅・店舗などの所有者または賃借人にまで選挙資格が広げられた。その結果改正直前に43万人であった有権者数が65万人に増加し」，「これによって上・中層中流階級だけでなく，下層中流階級の一部の成年男子にまで選挙権が与えられ」[24]ることになったのである。このようにReform Billは大地主のみならず多少の資力のある者に広く選挙権を与えることとなり，政権は世襲的権力を保っていた貴族から中流社会，すなわち産業革命による新興ブルジョアジーである産業資本家，商工業者へといよいよ確実に移ろうとし，「Welling公のTory党内閣の後を承けたGrey伯のWhig内閣は大いに勢を占め，この頃からToryはConservative, WhigはLiberalとよばれるようになり」[25]，以後Victoria朝（1837～1901）においては自由党内閣の時代は保守党の場合より三倍ほど長く続いた。

第一次選挙法改正以前の政権党であったTory党内部には伝統的な保守派グループと自由主義的進歩派グループがあり，Whig党も右派はTory党に流れ，左派が自由主義的グループを形作っており，「第一次選挙法改正はGrey伯を中心とするWhig党とTory党内の自由主義的進歩派グループと無所属の急進派の三グループの共同戦線の産物であった。」[26]そしてこのReform Billについて注目すべき点は，それの「反対者にはWellington公のような保守的な新華族が多く，賛成者には古くから公侯の特権を受けていた大地主である世襲華族が多かった」ことであり，「これはイギリス貴族旧家のうちに進歩主義者の少なくないことを証する一例となった。」[27] Queen Aune（治世は1702－14）時代の建物を持ち，Treby Magna界隈でも随一の名門であるTransome家の世継HaroldがRadicalとして選挙に立候補したこともこのような英国議会内の傾向の影響であろうか。このHaroldのRadicalとしての選挙出馬に対する，誇り高き母親Mrs. Transomeの対応などについては後の4のところでふれることにする。

またこの時期には産業革命と並行して農業革命も行なわれたがそれについては3のところで論じ，また，産業革命による商工業の急速な発展に伴い拡大され活発になった都市部に住む労働者たちの間では新しい宗教が波及していったがそのことについても後の4のところで詳しく見ていきたい。

3．イギリス農業，農村の歴史について

19世紀初期のイギリスの農村の状態を知るには中世の封建農村の構造をまずみてみなければならない。これについての以下の考察の前半は宇野弘蔵氏の『経済学』上巻（角川全書24・角川書店，昭和31年）の29ページ～36ページ，40ページ～54ページから引用させていただいたカ所が多く，また同著書のその他の部分からも多くの論拠を得たことをここに断っておく。

イギリスの封建社会はNorman Conquest（1066）頃成立した。中央に王がいて次に貴族，僧侶の階層があり，その下の騎士までがそれぞれの所領を持っていたのである。

各領地は通常一個ないし数個の村落に分かれ，村落はそれ自体が一つの共同社会であって生産の単位でもあった。領主は単に土地を所有しているというのではなく，土地と共にこのような共同体を形成する人間を支配したのであった。そしてそういった村落をイギリスではマナ（manor）とよぶのである。

manorの中には中心に人家が固まり，さらにその中心に領主の家や教会，公会堂があった。川の近くには採草場があり，家畜の飼料が集められ，近くの森林からは薪や木材が採られた。また原野や休閑地，収穫後の畑で牛や馬や羊の放牧が行なわれたが，これには地力の回復という意味もあったのである。各農家のまわりには菜園があり，蔬菜が作られ，小家畜が飼われた。この中心部の外側が耕地になっており，さらにその外側に森林，原野があったのである。この村落の姿は何百年という月日を隔て，*Adam Bede*の時代，そしてまた*Felix Holt*の時代にまでその奥まった農村部に多分に名残をとどめている。

耕地は全体を大きく三等分する三圃制度（three field system）の下でmanorの農民により耕作された。三圃制度とは，秋播のライ麦，小麦が作られるwinter field（冬畑）と，秋播の燕麦，大豆，豆類が作られるsummer field（夏畑）と，何も作付はされない（で一年または一期間耕作を休める）fallow（休閑地）の三つに各manorの耕地を分割し，年々これを回転させながら耕作を行なう農業方法である。manorの農業はこの三圃制度の他に，各農民の耕作地の自然的条件の差異を均等化するため，各農民の土地が一カ所に集中されることなく，他の人の耕作地と入り混じっている耕地混在制がとられていた。manorの中心をなした者は農奴（villain）であったが，彼らの間でも分与された土地の大きさはさまざまであり，その土地の大きさによりfull villainとはhalf villainとかcotterとかよばれていた。manorにはその他少数の自由民と奴隷と，小数の手工業者，すなわちカジ屋，大工などの専門の職人がいた。しかしそういった専門の職人たちもふだんは農業をやっていて自給的色彩は強かった。当時の農民は衣料品をはじめ多くの工業品も自分で生産し自給していたのである。この専門職人の分化の過程がどのようなものであったかということについては推測の域を脱しきれないけれども，*Adam Bede*の中の腕ききの大工Adam Bedeには「血管の中に農民の血が流れていた」[28]という表現があり，どんな職業にある人もそのルーツは農民だったのではなかろうか。

さらにmanorの土地はすべての農民に分与されていたのではない。一部分は領主の直営地（demesne）となっており，しかもそれもまた農民の土地と混在していたのである。

農民は菜園だけは自由に耕作することができたが，耕地の方は作付作物についても仕事の順序や日時についてもすべて共同の規律に従っていた。作物のことやその手順はだいたいは慣習的にきまっていたが，場合によっては農民たちが公会堂に集まって相談して決めた。さらに飼育しうる家畜の数，放牧しうる数や時期，刈草の量どは保有地の大きさに準じた権利が各農民に与えられた。

manorの農奴は領主の土地提供に対し貢賦をおこなう義務があったが，それと共に次のような3つの身分的束縛があった。

1．土地に緊縛され農業をすることを強制された。すなわち移転の自由，職業の自由がみとめられておらず，それをおかせば領主に処罰された。

2．結婚や相続も自由にはできず，領主の許可を必要とした。

3．領主はみずから規則をさだめほしいままに彼らを処罰することができた。

農奴が領主に対して負っていた貢賦は労働提供の義務として週2･3日領主の直営地で耕作や家畜の世話をしたり，領主の家の修繕や掃除，生産物の運搬などにたずさわる週賦役と，農繁期に領主の家の農業を手伝う特別賦役とがあったが，その他にも家畜や卵や魚などを領主に貢納し，結婚，相続の際に許可料を支払い，また領主の不時の要求に対して貨幣を支払う義務があった。13世紀以降にはこの他にさらに戦争の際の軍役も課せられた。農民たちはその他に教会に対して生産物の$\frac{1}{10}$を年々納める十分の一税の義務もあった。(29)

manorの制度は自給自足的な封鎖的な経済を原則としたが十字軍以来商業が発達するに伴ないmanorの外から特に奢侈品ないし便宜品が持ちこまれるようになり，それを買うために農民は自分の生産物のうち余ったものを売って貨幣を得るようになった。

生活必需品は，単に食料だけでなく，衣料品，燃料，家具，什器まで家庭工業によってまかなっていた。農民の生活は常に共同体の中で行なわれ，共同体の社会的規制のうちにおいて行なわれなければならなかったため，彼が何をどれだけどのような方法で生産するかはけっして彼の自由にはならなかった。この農民たちの共同体への帰属感，連帯感は，当時の農民たちにとっては厳しいものであったかもしれないけれどもGeorge Eliotが*Silas Marner*の中で最高の価値を置いているmutual helpfulnessや'neighbourly'などの村人の気質は村の古くからのこうした伝統の中から培われたものであるかもしれない。(30)

領主は直営地の生産物の収入により生活を支え軍備をととのえ領主たる地位を保持することができた。そしてその直営地は領主がcotterなど人を顧って経営する部分もあったが主要部分は農奴の賦役労働によって経営されていた。*Adam Bede*の中の大地主Donnithorne家の直営地はほんのわずかな面積しかなく邸内の執事の管理に任されていたが，それとても執事の老齢に伴なう執事退任時に賃貸されることになり，Raveloe村のCass家などをみても19世紀頃になると直営地の取り扱いには大きな変化が生じていたようであるが，しかしこのmanorの農業構造の名残りはその他にも*Adam Bede*の中で，例えばMr. Poyserの耕作する畑にはいわゆる'飛び地'（outlying field）があるというような形でしばしば発見できることは驚くべきことである。

ともあれ当時の農奴の労働は自分の畑の耕作と家庭工業に従う，自己および家族の生活を支

える労働と，領主の畑で耕作し，領主に献納するさまざまな生産物を生産する労働の二つに分かれていたのである。農奴の生産力がだんだん大きくなるにつれて農奴の手もとには剰余生産物が恒常的にのこる傾向になり，それが農奴を商品経済の中に強くまきこんで結局manorを崩壊させることになった。

manorは14世紀後半から崩壊過程に入る。これは農民間に階層の分化が生じ富裕な農奴は没落農奴の土地をもあわせ持ち，賃銀を支払い彼らをやとい入れ耕作させるようになったことにあわせて，十字軍以来外国の風物にふれたことによってますます奢侈的になった領主が，兵器の発達によって軍備がいよいよ拡大されて商品経済の中に深くまきこまれ，貨幣を必要とするようになったことがまずその一番の原因であろう。その領主の要求を満たすために農奴の直営地での労働賦役は生産物地代，貨幣地代となったからである。農奴の労働で運営されなくなった直営地は，領主が没落した農民を賃労働者としてやとい入れ耕作させたり，さらにはそれを農民に分割し地代を得るようになった。

この一大変革がスムーズに行なわれたのは，イギリスにおいては領主の搾取が比較的ゆるく，かつ農民が早くから商品経済に入りこんでいたために労働地代の金納化が直接的に行なわれ，それが農奴の地位を高くし，彼らの解放を容易にしたのである。

さらにmanorの崩壊の大きな原因になったのは14世紀初めの黒死病（ペスト）の大流行である。この黒死病によってヨーロッパの人口は三分の一に減じ，労働力不足のために領主は直営地の維持が困難となったためそれを農民の間に分割し，みずからは貨幣地代の収得者となったが，安い地代でがまんすることを強いられ，逆に農民の方はわずかな地代を支払うだけの自営農民に転化していく。領主の力が強かった地方でも領主の賦役強化に反抗して農民たちは一大農民戦争を起こし，自己の解放を進めていった。その結果15世紀の後半には多くの地方でただ軽少な地代を負担するにすぎない，領主の身分的束縛が非常にゆるやかな農民層である独立自営農民（yeoman）が出現した。

15世紀末頃になると世界的に商業が異常な発達を遂げ，スペイン，ポルトガル，オランダ，フランス，イギリスなどのヨーロッパ諸国は新大陸の南北アメリカ，および東洋(特にインド)との貿易にしのぎをけずり，それは毛織物工業の隆盛期を到来させ，毛織物工業の発展がヨーロッパ諸国の世界貿易にしめる地位を決定した。イギリスは原料の羊毛の需要が急速に増大し，封建貴族たちは商人や富裕な農民と結托しつつその領地を囲いこんで牧場にし，みずから経営したり，商人や富裕な農民に貸しつけ，高い地代を獲得したのであった。これがenclosure movement（囲い込み運動）である。このため一般農民は土地から駆逐，追放され，近代的無産労働者が大量に創出されることになった。しかしただちに賃銀労働者として働く口を持たない農民たちは浮浪人や乞食や盗人となり，大きな社会不安をもたらした。そのためQueen Elizabethは救貧法（Poor Law）[31]を定めそれに対処した。George Sturtは自著*Change in the Village*の中で'共有地のenclosureと都市からの資本の流入が伝統的村の性格を破壊した'[32]と述べている。

一方地代の軽少化と貨幣価値の低落，手織物業の発達により農家にもたらされた副業等々で富裕になった農民層であるyeomanは16世紀になると農村では有力な地位を占めることになっ

ていくが，以下に述べるyeomanについての考察は，戸谷敏之著『新版イギリス・ヨーマンの研究』（御茶の水書房・1976）に依拠している。

yeomanは旧来から超過労働の一部にしか相当しない固定した貨幣地代を支払うだけの小独立生産者—小資本家なのであった。その構成部分は富裕なfreeholders, customary tenants, leaseholdersであるが，これらyeomanの中には貨幣価値の下落によってほとんどが名目だけのものとなった貨幣地代が16世紀の終り頃になると消失してしまう者も多かった。ヨーマンは牧羊，市場販売，下僕の雇用により大いなる富をなし内部から農業資本家を生み出した。Harrisonは『ヨーマンのあるものはまた非常な富を致し倹約しない地主から土地を買い取り，その子息に多大の土地を残して子息の多数は地主になる』[33]と記述している。

ヨーマンの特質についてまたHarrisonは「手工業者（都市の）も農民も食卓では非常に豪腹で人好きよく，会食する時は腹から笑い，質朴であってイタリー人やフランス人のように心の内で策を廻さぬから彼らにつきあうとためになる…。」[34]といい，またFullerlは「わがヨーマンは粗金の地主で次の代には洗練される。家にいる時には見ず知らずの人にも貧乏人にも大まかで，もてなしの女神が亡くなるときケントのヨーマンに囲まれて最後のうめきを発したのだと説く者さえある。今でもヨーマンの食卓では…実のある盛沢山な食事をごちそうに与えるだろう。…戦争のときは歩兵で従軍するけれど，その逸る心は意気の駒にうちまたがり，何人の奴隷たることなく自己の国王以外に服従するを知らぬ。潔白であり且つ独立していると自ら勇猛な心が生まれるものだがそうでないと勇気を持つのにさえ主人の許しを受けるのが必要となる…。」[35]と言っている。このyeomanの特質が社交好きのRaveloe村の上流社会を決定しているものということができるが，その状態については4の部分でみることにする。

17世紀にはyeomanは耕作をはなれ単なる地主となっていく。また貯蔵した貨幣を高利貸附資本に転化したyeomanもあった。その後農業に入りこんできた商人資本や諸多の産業部面からの産業資本はyeomanと結びついて「牧畜家」「農業家」が成立し，彼らは賃銀労働者を用いて生産する資本家となった。彼らの持つ集中された巨大農場は分散した零細農場に比べ収穫量は断然多く，耕種の自由，畜産における技術の進歩，商品市場への適応の点で大きな利点があった。手織物業の隆盛期（16世紀初）を迎えて，牧羊がもっとも有利な農業部門となると，牧場に転化された農場からは大変な収益があがるようになった。

しかしこの傾向は独立自営農民としてのyeomanの力を著しく減ずることになり，yeomanの土地は加速度的に大資本に吸収されていくのである。17世紀に入ると石灰，泥灰土，砂などによる施肥の方法が考研され，排水，潅漑設備も整い，園芸なども輸入され，輪作，冬作作物に新しい方法が施されたり，農具が著しく改良されるなど，農業上の進歩，生産方法の改善などが行なわれるようになるとみずからの土地にそれだけの資本投下ができなかったり他のもろもろの事情でその進歩・改善に追いついていくことのできないyeomanたちはさらに没落していった。またそれまでyeomanが担当していた鉄工業，製塩業，製陶業などが工業資本によりyeomanに副業を提供しなくなり，これらもろもろの事情によって，18世紀末産業革命の前にyeomanはほとんど消滅してしまう。（このyeoman消滅の時期については経済学者による著書の中

ではここに述べたように18世紀末とするのが通説であるが，George Eliotは幼少期〔1820年代頃〕yeomanやpeasantの中で過していたことを明確にしている記述があり，またRaveloe村の上流階級の人たちはほとんどyeomanであったようであることを考え合わせると，イギリスの農村の様態は地域によって大きな差異を生じていたのであろう。[36][37]）頑固一徹，勇猛果敢，品行方正であったこれらyeomanのうち，みずからの土地を手離し鍬を捨てたyeomanは一部は産業資本家，すなわち工業資本家，農業資本家，ないし地主となり，また賃労働者に落ちこんだ者，アメリカに渡った者もいた。

yeomanの興亡の間，イギリスでは後期重商主義政策がとられ，航海条例（Navigation Act・1651年，1660年）などが制定され，各国との貿易がいよいよ活発になった。毛織物業の隆盛は農村の婦人や子供に，低賃銀ではあったが糸紡ぎという副収入をもたらした。[38]しかしそれも2のところで述べたとおり産業革命の進展と共に消滅する。

19世紀前半のイギリス経済は資本家，労働者，それに土地所有者を基本的な社会階級として有する典型的な資本主義社会となる。資本家的経営のもっとも困難な農業にあってさえ，比較的早くから資本家的関係が導入されつつあった。18世紀後半，穀物の輸入国に転じたこととエンクロージャーの激化によって農村の旧来の土地所有者は近代的な土地所有者と資本家的借地農とに分化した。そして多くの小農（yeomanなども含まれる）は農業における賃銀労働者に転落していく。また旧来の土地所有者は農業における資本主義の発展と共に近代的土地所有者となり，一定の経済法則にしたがった地代を支払われることになった。所有から地代を得られることで，いわば土地は一種特別の商品ということになる。また19世紀前半のイギリスの基本的社会階級として先に述べた三つの階級のうち資本家はその利潤をできる限り資本に転化しつつ資本の蓄積に励み，土地所有者は地代収入をそのまま個人的消費にあてる浪費階級となり，そして労働者は賃銀により労働力の再生産と自分自身の子女の育成に努めたのである。

またイギリスの農村の歴史を見る上で特筆すべきことは産業革命と並行して行なわれた第二次農業革命である。これはマルクスが「大工業がはじめて機械によって資本主義的農業の恒常的な基礎を与え，巨大な数の農村民を徹底的に収奪し，家内的，農村的工業—紡績と織物—の根を引きぬいてそれと農業との分離を完成する」[39]と表現している事態である。

イギリスの農業は前述のように中世以来三圃制度（three field system）と耕地混在制のもとで行なわれてきたが，[40]18世紀初めにタルによって条播機が発明され，またタウンゼントらがカブの大規模栽培を行ない根菜類の作付が開始されたのとあいまって，三圃制度は輪栽式農法に，また耕地混在制も土地囲い込み（enclosure movement）によって近代的なより能率的な土地制度に改められた。この時のエンクロージャー（enclosureもしくはinclosure）は「従来一年の全部または一部にわたって共同権（common right）が存在していた土地を，かきね，その他の境界標識で囲み，共同権を排除し，私有地であることを明示」したもので「荒蕪地（waste）にでも，共同地（common）にでも開放耕地（open-field）にでも行なわれ」[41]た。この運動は英仏間の植民地争奪戦の総称である，1689年から1697年のファルツ侵略戦争などにより政府支出が増大され，それと共に人口の著しい増加があったため，18世紀半ばにすでに穀物輸入国に転じて

いたにもかかわらず，穀物，その他の食糧品の価格騰貴を招き，大農業資本家が土地生産物の増産を目的として行なった農村内の動きである。

この農業の新技術導入と農法の工夫，それからenclosure等によって土地からは多量の生産物があがるようになり，地主には高地代の収入となり，農業資本家には高収入をもたらし，農業労働者には高労賃を可能にし，国民一般には多量の国産食料品を供給する結果となった。[42]そのためイギリス連合王国の1781年の人口は1300万人であったのが1841年にはその2倍余りの2675万人となったのに食糧自給率は90%ほどを維持することができたのである。[43]

しかし農業革命の，こういった農村の変革の度合いは地域によって大分差異があるようで，Hayslope村やRaveloe村では，産業革命の影響がほとんど深刻な問題になっていなかったのと同様，この農業革命についてもspinning wheelが過去の道具として物置に片付けられる程度にしか村人の生活に作用してはいない。特にRaveloe村は産業革命からも農業革命からも隔絶された，全くのtimeless villageなのであった。しかしHayslope村では農業機械の進歩や農法の改善などに農民たちは大きな関心を示しており，またその村の進取の気性に富んだ若き地主Arthurは農業を中心とした領内の改善に心を砕いている。Hayslope村やRaveloe村から30数年を経たLittle Treby村は都市の近郊に位置していたこともあり，そこでは古い農法というものが村落の存続の危機にもつながるものとして意識されている。このように同時に行なわれた産業革命と農業革命は，産業革命が都市部から次第に農村部に浸透していき，そして農業革命は農村内部からの変革を意味するものであって，この二つの画期的事象によってイギリスは名実ともに近代国家へと大きな変貌を遂げたのであった。

しかしこのような変革は何の抵抗もなくすべてがスムーズに行なわれた訳ではない。1830年代，といえば*Felix Holt*の年代にあって現に*Felix Holt*の中でも暴動が小説の最大のできごとになっているのだけれども，その年代には英国南部や英国中部（Treby MagnaはBirminghamに近いイギリス中部の街と推定される）では，低賃金（Low wages）や失業（unemployment）で捨てばちになった労働者によって起こされた暴動で，干し草が焼かれたり，すでに手薄になった冬期雇用をさらに脅かす脱穀機（threshing machines）が破壊されたりして村落の平穏さが大いにそこなわれたのであった。[44]

以上のような時代背景と農村の歴史を背負っているHayslope村やRaveloe村やLittle Treby村が実際にどのような姿を呈していたかを次の章でみてみよう。

（注）

本文中*Adam Bede*の引用はCollins CLEAR-PRESS (London and Glasgo, reprint 1963)を，*Silas Marner*の引用はThe Penguin English Library (1978, Great Britain)を，*Felix Holt the Radical*はEveryman's Library (London : Dent, 1975)を定本とした。

(1) *Felix Holt* (Everyman's Library) chapter 3

(2) 「サイラスマーナー」（岩波文庫　土井治訳，1988年）解説

(3) 本学「紀要」十一号，「*Adam Bede*にみるGeorge Eliotの女性観について」

(4) *Adam Bede* (Collins CLEAR-PRESS) Introduction by Gerald Bullett

(5) 同上*Adam Bede* Introduction

(6) 淡赤色の花をつける野ばらの一種（from RANDOM HOUSE）
(7) はじき玉　石・粘土・ガラス・磁気・めのう・銅鉄で作った，おもにはじき遊び（はじき玉を親指ではじいて他のはじき玉に当て，地面に描いた円の外へはじき出す遊び）などの遊戯に用いる。
(8) 病気になった時や老後，経済的援助が受けられるよう会員は定期的に会費を納めていたクラブ。
(9) 「経済学」上巻　宇野弘蔵編　角川全書24　（昭和31年）P．77
(10) 「アダム・ビード」　G・エリオット　阿波保喬訳　（開文社出版　昭和54年）　第52章　注2
(11) *Silas Maener* (The Penguin English Library) Notes 1. flax（亜麻）は美しい青い花をつける植物で当時はwool（羊毛）と同様に経済の主要部分を占める作物であった。テーブル掛けやベッドカバーに必ず使われ，さらには絹製品を買うゆとりのない人たちの下着(body-linen)やシャツにも使われた。
(12) *Donbey and His son*
(13) 「経済学」上巻　宇野弘蔵　角川全書24　P．99
(14) *Adam Bede*, chapter 52
(15) *Silas Marner*, chapter 21
(16) *Silas Marner*, chapter 3
(17) 「英国産業革命史」Arnold Toynbee著　塚谷晃弘・永田正臣共訳（邦光書房　昭和40年）P．58
(18) 以上「　」の部分は「世紀末までの大英帝国」—近代イギリス社会生活史素描から引用。長島伸一著（法政大学出版局　1987年）P．110
(19) Daniel Defoe（1659？－1731）イギリスの小説家，ジャーナリスト，経済学者
(20) 「英国産業革命史」Arnold Toynbee
(21) *Great Expectations*（1861年）
(22) *Adam Bede* chap. 16
(23) 「イギリス文学史」斉藤勇著（研究社　昭和32年）P．375
(24) 以上の「　」内は「世紀末までの大英帝国」長島伸一著から引用
(25) 前掲「イギリス文学史」斉藤勇著，研究社P．375
(26) 前掲「世紀末までの大英帝国」P．187
(27) 前掲「イギリス文学史」P．375
(28) *Adam Bede,* chap. 16
(29) 国教会およびその牧師の維持扶養のため教区民に課せられた税。地主が集め管理をする。今日では廃止（「アダム・ビード」開文社出版，第44章　注(1)）
(30) *Silas Marner* Introduction by Q.D. Leavis, P16
(31) 公費で貧民の救済・生活扶助をするための法律または法制度
(32) *Silas Marner* Introduction, P18
(33) Ibid. P 57
(34) Ibid. P 43
(35) Ibid. P 45
(36) *Adam Bede* Introduction
(37) *Silas Marner* chap. 3
(38) 1651年より1847年までの間に出されたいくつかの英国の条例；英国や英領植民地の貿易品はイギリス船のみが運ぶこと，特定の商品は植民地から英本国にのみ輸出すべきことなどを規定したもの。英国貿易の拡大と競争国の貿易制限を目的としたもの
(39) Karl Marx（1818－83）　ドイツの経済学者・哲学者・社会主義者
(40) 前掲「世紀末までの大英帝国」P．97
(41) 「英国産業革命史」一條書店　小林芳喬著　昭和39年P．225
(42) 同上　「英国産業革命史」P．232

(43) 前掲「世紀末までの大英帝国」P．99

(44) *Labouring life in the Victorian Countryside* by Pamela Horn (Alan Sutton Publishing, Gloucester)